

# PHD LETTER

## <34>

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT

1990・3

PHD運動とは1962年(昭和37年)より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事された岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年(昭和56年)からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会

編集人：草地 賢一

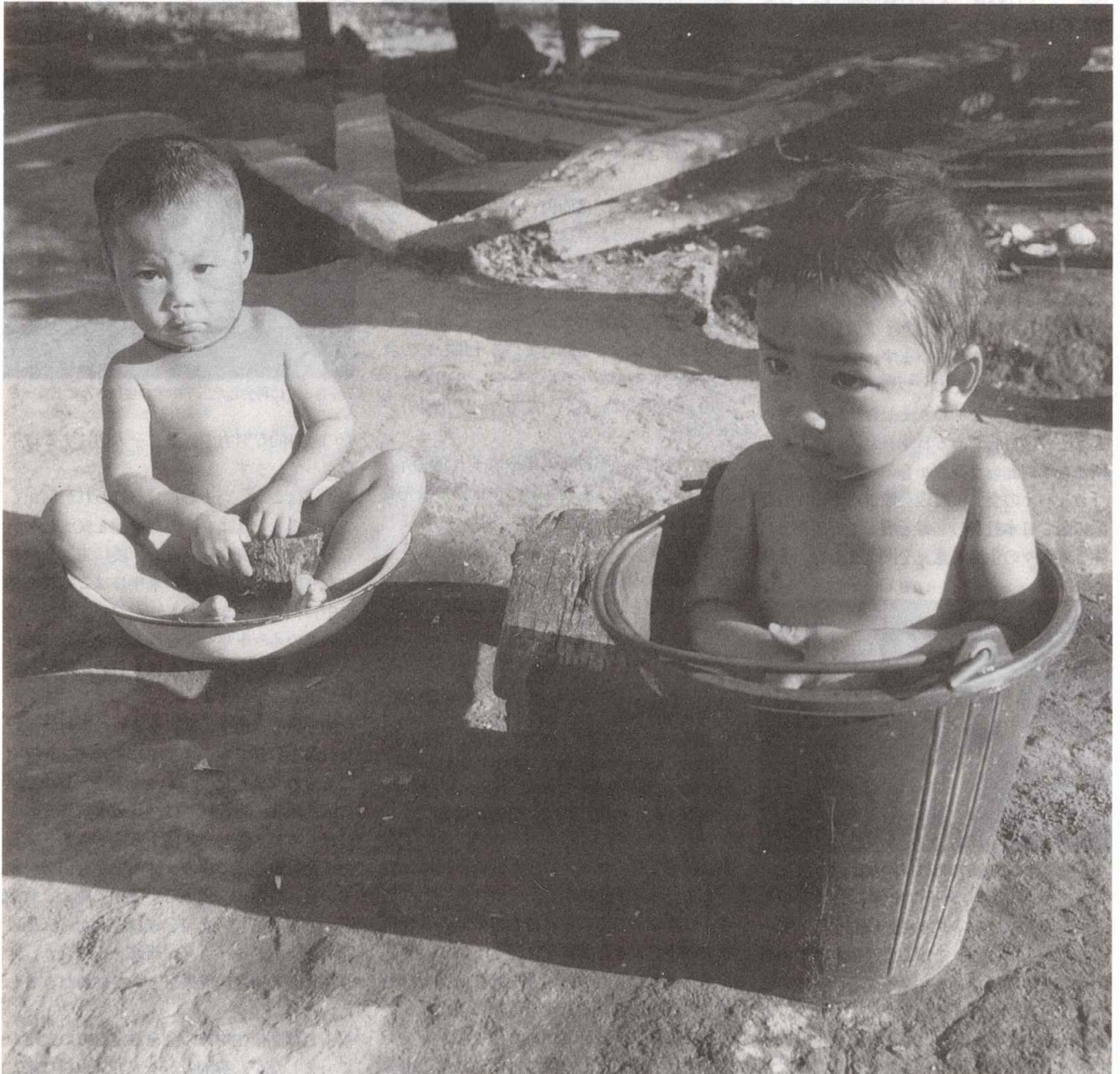
住所：〒650 神戸市中央区元町通5-4-3 元町アーバンライフ202  
TEL(078)351-4892 FAX(078)351-4867

郵便振替：神戸1-29688 財団法人ビー・エイチ・ディー協会

定価：100円

レイアウト：エフアンドエフ

- 研修生 東・西スタディツアーレポート.....2P
- タイスタディツアー.....4~5P



タイ北部カレンの村で

日光の下、ゆったり水浴びをする兄弟  
大人はこんなことはできないけれど、  
からだの小さい子供は、バケツ、洗面器で露天風呂  
つい、ユニットバスの我家を思いうかべた

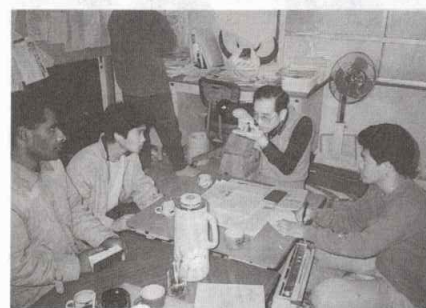
# 東/西日本 研修旅行報告

農家の現場研修が一段落すると恒例の研修旅行に出かけます。今期は11月16日～12月6日に東へ、1月22日～2月11日の間、西へと実施しました。

## 東コース

神戸-京都-彦根-豊田-甲府-鎌倉-逗子-柏/松戸-千葉-東京-横浜-川崎-藤沢-富士-津島-飯田-中津川-高山-富山-婦中町-福井-敦賀-高石-和歌山-神戸

国内研修旅行が始められ5年目になりました。旅行の目的は研修生のリーダーシップを開発することと同時に、日本人の側から研修生から学びわれわれの価値観、ライフスタイルを問いただすことも含まれています。今年の新しい訪問先の一つに横浜の日雇い労働者の街「寿」が加わりました。研修旅行のもう一つの目的である日本社会の病んでいる所から学ぶという観点からの訪問でした。「カラバオの会」に渡辺英俊さんをたずね繁栄の蔭で日本社会の一番矛盾している部分に生きる人々の生活と意見を聞きました。先生



カラバオの会の事務所まで渡辺さんのお話を伺う。バスや乗用車のタイヤを例に引きながら「寿」の人々はそのタイヤの役割を担っている。しかし車に乗っている人々はタイヤの必要ことは知っていてもタイヤそれ自体のことは知らないし、また知ろうともしない。乗り心地さえよければそれでよいと、大変理解しやすく説明して下さいました。この町で三人のフィリピンから来た海外出稼労働者と出会いドミーさんは初めてうわさに聞いていた出稼労働者からの話に聞き入っていました。タイにも同じ状況があり、また近い将来パプアニューギニアにも同じ問題が起きてくることをサンコムさん、トニーさんも理解したようでした。それだけに急激な工業化に伴う弊害と農業、農村を大切にしなければという考え方を再確認したようでした。

後半はトニーさんが夏に学んだ高山、そして富山、福井県をまわりました。神戸の会員、浜地律知さんの紹介で新しくつながった速星小学校、城之橋教会、インドネシアからの研修生アリ、アフナル、ベディさんの指導者の西伊豆の山本佐一郎さんのご紹介で出会った敦賀北小の皆さん、PHDに触れた方々がそれぞれの人脈にPHDの動きを伝えて下さっています。伊豆のツテで敦賀に行く、PH



伊豆の山本さん(右端)がつないで下さった敦賀の中学生たち

Dのネットワークは面白い。また今年ツアーでは3ヶ所のお寺に寄らせてもらいました。愛知県津島市の加賀善康さん、富山県婦中町の寺尾淑英さん、和歌山の桜井植峰さんのところで交流が実現しました。とくに加賀さんの大龍寺ではお寺で開いている子供むけの会を交流会にあてて下さいました。このようにこの旅の中ではいろいろな方々との出会いがあります。さらに今回は、自動車工場や原子力発電所の見学も組み入れました。日本や世界の最先端の部分と日雇い労働者の街の対比。彼らにとって専門分野だけでなく広く社会をみることも、帰国後の村づくりの方向を考えるのに大切なことだと思います。むろん日本人にとっても。

## 西コース

神戸-北九州-福岡-庄内/金田町-福岡-熊本-水俣-長崎-諫早-長崎-波佐見町-下関-広島-広島-口和町/庄原/上下町-福山-岡山-倉敷-岡山-山陽町-神戸

東に較べて西のコースは少し性格を異にしています。つまりチクホウ、ミナマタ、ナガサキ、ヒロシマとそれぞれ日本の戦争と戦後の歴史の中で大きな問題を提起している事柄をたずね、それらの重い問題を背負い、また地道に取り組んでいる人から直接に学ぼうとするところに第一の目的があるのです。筑豊では犬養さん、水俣では浜元さん、川本さん、田ノ上さんそして鬼塚さん、長崎ではYMCAの松本さん、広島では被爆者の久保浦さんというふうによくの人々からそれぞれの問題を深く学ばせて戴きました。また各地で迎えて下さる多くの方々と交流が深められました。筑豊、庄内町に生まれた、アジアと筑豊に虹を架けようという「虹の会」の動き、熊本、長崎、北九州、広島各YMCAなどのネット

ワークによるご支援も深められました。また西南女学院との交流から、祝町小学校との関係を拡大して下さった「北九州アジアを考える会」の活躍、福岡女学院との関係を深めて下さった春日東教会、その他早稲のウェスレアン短大、北九州の折尾女子学園、下関の「あい・ネパールの会」の心暖まる協力。広島の「アジアに学ぶ会」、広島YMCA国際コミュニティセンターが中心になって開かれた高校生のためのフリースクールAPALの発足、と数えあげればきりが無い程の交流の深まりでした。

なかでも三年目を迎えた長崎県波佐見町での農業青年との交流は大きな可能性を生み出しました。過疎に悩むこの町に住む中村牧師夫



7ヶ月ぶりに再会した上下中学の生徒さんとドミーさん

妻の献身的な努力で「農」を大切にす青年が育っています。青年達はこういいます。「われわれが何かしてあげるといふより、あなた達と交流しながらわれわれ自身を問いただし、農に生きる誇りを取り戻したい」「今年か来年にはこの波佐見の中に何かか起きるかも知れない。PHDはそのためのネットワークを作る媒介として関わって欲しい」と中村さんはPHDに期待を寄せて下さっています。

今回の旅では道中、雪にみまわれ、研修生がなれぬ手つきで車のタイヤにチェーンを巻くこともありました。(これも研修?)しかし逆に広島県北、口和町では地元小の小学生とともに初めてスキーを体験することもできました。強行軍の旅の中の一休みとなり気分一新、その後、庄原市、上下町、福山、岡山、倉敷、岡山県山陽町での交流を続けました。広島県北では夏、ドミーさんが研修をしており、皆さんに彼の研修の成果をきいていただきました。

福山では高校生対象の会を設定していただいていたが、参加者が一人で、取材に来た新聞記者が4人、どう対応すればいいのかあわてましたが、だからこそ今の高校生をはじめとする若い人達にもっともってアジアのこと、第三世界のことを伝えていかねればとの思いを強くしました。また岡山、倉敷にも研修を引受けて下さる可能性がみつき、研修生がつながるアジア・南太平洋と日本の草の根同士の交流がますます広がる気配です。

## 第7期研修生 レポート

### トニーさん(パプアニューギニア) 4年目の島根研修

12月から1月にかけては、松江で保健衛生の現場が中心となりました。87年暮にタイツアーに参加された松江保健所の関龍太郎所長のお世話で、保健予防、環境、栄養、食品監視といった保健サービス全般を見学し、地域住民の安全で健康な暮らしが、どのように支えられている様子を勉強しました。続いて、松江農業改良普及所の佐藤浩一先生の手配で、農業工場、水耕栽培、島根大学農学部等を訪問しました。この中で、宍道町の和牛の養牛生産をされている永江さんの自給システムに、村に帰ってからのヒントを得たようです。さらに、宍道町役場保健福祉課の浜村愛子さん(88年タイツアー参加)のお世話で、環境、母子保健、食生活改善といった保健行政を研修しました。この間、有機農業の実践者である木次乳業の佐藤忠告さんも訪ね、また、加茂町の成人式に参加しました。保健衛生の研修は、男性のトニーさんにとって、むずかしい部分もあった様子ですが、健康を維持していくための日常の地道な活動に大きな収穫をえたようです。また、島根の方々の暖かさにも大感激のトニーさんでした。

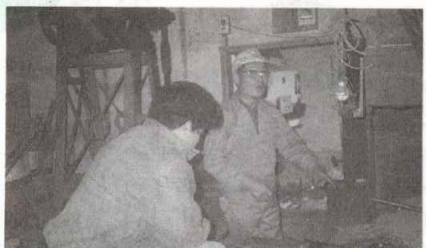
島根-丹羽武夫宅(神戸市)



松江赤十字病院看護学校で白衣に囲まれ照れるトニーさん

### ドミーさん(フィリピン・ネグロス) 村人の手で鍬、鋤、鎌を

さとうきびのプランテーションで「農民」ではなく「労働者」として抑圧され、農機具の作製さえ地主から許されなかったネグロスの人々。ドミーさんは日本で野かじの研修を熱望していました。「自分たちで道具を作ることができれば、村の人はとても喜ぶます」この野かじの指導でお世話になったのが、兵庫県波賀町の東田十次さんです。



波賀町でご指導いただいた東田十次さん  
これまでに研修生を何人も指導して下さい、タイの村にも3回行かれた田中五郎さんのご紹介でした。日本でも鍛冶屋の技術は、機械化による大量生産、自動化に切り替わり、消えつつある技術で

すが、それだけに東田さんは、自分の技術がネグロスで役に立つのならと、一生懸命指導して下さいました。また、昨年6月と今年2月には広島県庄原市の山手智さんのお宅で、野かじの技術を勉強しました。お二人の熱心なご指導の中で、軟鉄と鋼を組み合わせる農機具の硬度を高める方法に注目しました。帰国後の活躍が楽しみです。

東田十次宅(兵庫県・波賀町)-三谷康宅(兵庫県・黒田庄町)-丸山悦司宅(兵庫県・加古川市)-牛尾武博宅(兵庫県・市川町)-山手智宅(広島県・庄原市)-杉岡悦宅(芦屋市)



庄原で山手智さんから冷却タンクの説明をきくドミーさん、右は紹介者の三上さん

### バムルンさん(タイ・東北) 東北タイから第3の研修生

6期ワラヤさん、7期サンコムさんと同じ出身地から、サイナファン農民協会のリーダーであるバムルンさんを7期の短期研修生として迎えました。サンコムさんの研修先を訪ね、また西日本旅行に加わりました。彼は村の農民達の組織化を図り、豚の組合システムを導入し、餌の自給、販売の自立に取り組んでいます。上からおしつけられる開発計画を批判し、山田さん(左)の説明をうけるサンコムさん(中央) 本当の民衆(農民)の自立 バムルンさん(右)を成し遂げるために活動を続けているバムルンさん、ワラヤさん、サンコムさんとの協力が楽しみです。

### サンコムさん(タイ・東北) 養豚を広めるぞ

彼の後半の課題は養豚でした。10月に続いて2度目の研修は、彼の村の中堅リーダーのバムルンさんと一緒にでした。養豚の内容については、病気に なった豚にどんな薬を用いたよいかという対処法、そして餌の配合が中心となりました。自分たちの育てた豚を加工して直接消費者の手許に送ってきたいとの抱負を語ってくれました。その方法として、指導をいただいた山田さんの夜の食卓にのぼった豚のくん製に興味を示し、手作りの焼き豚にも挑戦しました。帰国後の活躍が楽しみです。

青位真一郎宅(兵庫・八千代町)-丸山悦司宅(兵庫・加古川市)-山田芳弘宅(兵庫・社町)-岡崎成信宅(神戸市)

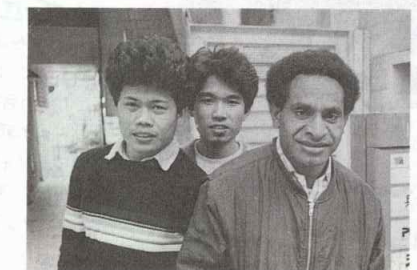
心に参加している「市川親鸞塾」の会合にも参加し、解放の神学の実践現場の報告を通して親鸞の思想とキリスト教基礎共同体運動の実践とのユニークな対話が深められました。

## ネグロスから ピーターさん来神!!

フィリピン、ネグロスからの最初の研修生ドミーさんの送り出し団体KASAMA(南ネグロス小農民協会)の議長ピーター・クアロス氏が去る1月19日から21日までPHD協会を訪ねました。短い滞在期間でしたがドミー君の研修先牛尾武博さん宅を訪問し、交流しました。また牛尾さんが熱

## 1年間お世話になりました。

昨年4月から1年間、研修してきたトニー、サンコム、ドミーさんの3人が、3月22日大阪を立ち、10日間フィリピン、マニラの北、カバルドンで村づくりの実践を経験した後、村に帰ります。1年間、ご支援いただきありがとうございました。



わたしはあなたのおかげで、この研修ができました。ありがとうございます。トニーさん、サンコムさん、ドミーさん、みなさんのおかげです。また、PHD協会の皆様、そして、神戸のみなさん、ありがとうございました。これからも、よろしくお願いします。MADAMONGLOBO GALLOO PANGLOBO DOMINADOR S. GALLOO PANGLOBO

4回目となったタイ北部へのスタディツアー。連続3回参加の田中さんをはじめ13人が、第3期生プリチャーさん、第4期ベリアさん、ウィラットさん、第5期コマさんの村を訪ねました。当初、東北タイの村へ帰った第6期ワラヤさんの村も訪ねたかったのですが諸般の事情により果たせず、ワラヤさんにこのツアーに合流してもらい再会しました。ベリアさんは村の子供たちへの教材づくりが今の仕事。ワラヤさんは村の農業指導コースでトレーニング中のところをぬけてきてくれました。みんなとても元気でした。

●日程 1989.12.24~1990.1.2 ●訪問先 タイ北部 チェンマイ-ボッコオ村-ムシキ-村

竹内一浩 (加古川市・小学6年)

タイでみたニッポン

タイに着いて、気の付いたことは、そこら辺の道路の両側に、トヨタ、ニッサンなど日本の自動車の会社の看板がいっぱいあったことだ。そして、ずいぶん前に日本でも走っていたオート三輪がタクシーとして走っていた。チェンマイから村までは、とても遠く、道路も悪かった。プリチャーさんの村の畑の野菜を出荷するのは大変だと思った。

西村小枝子 (西宮市・甲南大3年)

人も自然の一部

カレンの村で、日本での生活を振り返った時「あほちゃうか」と思いました。あまりにも自然とかと関係ない生活をしているからです。鶏の声と共に目覚め、暗くなったら寝る準備をして「ああ眠む。今、何時?」「7時30分」「...。」という生活はとても快適でした。バナナの皮などを道端や、家においては窓や床のすき間から投げました。それらは土に還るか動物が食べてくれる。すべてが経済発展の上で成り立つ私達の生活は間違いで「人は自然の一部やねんなあ」という事に気付いて心から感謝してるのです。

黒田和人 (加古川市・高校3年)

村の生活

上空一面青空でした。朝は少し冷えていたけれど、昼間になると暑くて、半そでの服一枚でも充分なくらいで、夜になると着膨れしても寝ている間、風が入ってきて寒くて何度も目がさめました。少しでもカレン語を話すことができていたら、もっと楽しかったのと思いました。

上原真理 (神戸市・幼稚園教諭)

カレンの人々との出会い

タイの人たちの写真を見るたびに感じるものがあつた。「この笑顔は、どこからくるのだろう」ということ。それは、日本人が忘れてしまっているほほ笑みだと思った。「日本人が失いかけている大切な何か、またここには残っている気がする」この思いが、参加する動機になった。カレンの人々の村に、4日間滞在し思ったことは、家族のつながりが深いということ。子供たちは、よく手伝いをしていた。家の中での自分の役割があるということは、自分が家族にとって必要な存在だという自覚につながるのではないと思う。作業を共にすることで、家族間の会話も生まれるし、互いの意思疎通もできるようになるのではないだろうか。カレンの村の家庭には、父親の存在があつた。子供は、働く親の姿、流す汗をみて育つ。そこに、親への信頼感が生まれてくるように思った。

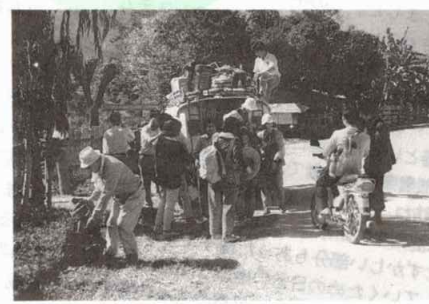


食事をしながらコマさんから村づくりの進展をきく

中尾卓英 (神戸市・PHD協会主事補)

村づくりに大切な村人の自発・自主・自立

チェンマイについて翌日、ムシキ-村のプリチャーさんの相談相手になっていただいている浅井重郎さん夫妻を、ライ病患者の更正施設マクケン・リハビリテーションセンターに訪ねた。浅井さんは1983年からそのセンターで農業指導をされ、現地側になって、外国の援助をみてこられている。そのときにご自身の経験と照らし合わせて「タイの人が自分たちでやろうと言いだしたことは根気強くやり通すが、外国の人が押しつけたことはダメになりそうになるとすぐやめてしまう」また「タイの人たちが自分たちで始め、うまくいきそうな動きに対して、海外の援助団体が目をつけ、モノ、金をだすのみならず、口も出し、せっかく育ちはじめた自立の芽をつんでしまう」と話されたことが、今後のPHDのやり方においても気をつけなければいけない点と肝に命じ、村に入ることとなった。



乗り合いトラックで村に到着したメンバー

松本祐子 (神戸市・甲南大3年)

私のひとりごと

カレンの村の人々の、いろいろな面での人間の大きさには、全く頭の下がる思いがした。顔は一見似ているようだけど、笑っている顔が違う。心の底から、思いきり笑っている。私もカレンの人たちのような、心の広い自然な人間になりたい!そして、黒いじゅうたんに、白い点が限りなくちらばって、すばらしく輝くボッケオの星空、泣きそうなくらい、うれしかった。あの村々にも文明の力が影響する時がくるだろう。それが文明の害でないことを心から祈る。

田中五郎 (兵庫県淡路市・農業/4.5.6.7.期研修指導)

人を活かす、地域を興す

私が何故この時期に三年連続でツアーに参加するのか。家族で正月を迎え、おとそを飲んで、年賀状に目を通しているのが田舎のおじいさんらしいのでは、と近所の人々が笑っているかもしれない。しかし私は、遠い遠いタイの山奥に5人の子供(研修生)がよくきてくれたと迎えてくれ、村ではすっかりお父さん気分なのだ。



ムシキ-村の農場で助言をする田中さんと大村さん

大村光良 (兵庫県梅東町・高校講師/89年フイリピン比較研修同行者)

遠くて近いカレンの人々

東南アジアを訪れたのは三度目である。何ひとつ役立ったことも出来ず、指導などもってのほか。しかし日本で出会ったコマ君がその後どうしているか、励ますことができるとツアーに加わった。彼の目標である協同組合はゆっくりだが村の人に理解されつつある。今、彼は日本でいうところの頼母子講的なものを家畜や野菜栽培の元本にすべく組織づくりをすすめている。焦ることなく村づくりに励んでもらいたいものだ。帰国して過剰包装に腹が立ち、贅沢な食事には心から喜ばず、「援助」の記事について眼がいく傾向は、アジアへのツアーの度ごとに強くなる。幸いにして私には生徒達がいる。豊かさの中にどっぷりつかった彼等に、私の体験を通して得たアジアの人々の温かさを、貧しさを、そして私達の責務を話して聞かせる機会がある。そうすることが私にできるせめてもの国際協力だと思っている。

藤岡佐知 (姫路市・兵庫県生活協同組合連合会勤務)

化学物質の怖さを知ってください

私のカバンはたいそう重かった。食品添加物の入っていないお菓子や缶ジュース、あと村では合成洗剤が使われているときき、せっけんの小袋をどっさり詰めこんできたからである。これらは友情の仲介者として役に立ってくれたが、難しい課題は残されたままである。「味をつけるものがないから」と味の素を沢山使う山の食事。けい色のついたあまーいお菓子。化学調味料の理由と同じで、材料に用いていた山の木の実がなくなり、せっけんが作れなくなったからと、手を洗うのにも使われていた合成洗剤。人の体に悪いだけでなく、合成洗剤を含んだ水があたりに捨てられると、鶏や豚などが飲み込んでやってくるというの怖い。人体や環境に良いものを選んで(作って)もらえるよう、メッセージを伝えたり、カレンの人の意見をきく方法を考えたいと思う。

堀内幸子 (島根県羽合町・教員)

まさに学ぶ旅

経済的利益自求の為に、自然破壊を平気で進めていく国では、人々の心はずさんでいけばかりではなからうか。いくつかの問題はありながらも自然を大切に、自然と調和のとれた、素材でシンプルな生活をしているメニャハディやムシキ-村の人々は、多くの日本人よりも、心豊かな人々だと私は思うのです。彼等から学ぶ事は多いと思う。



元気に再会したワラヤさんとベリアさん

第4回タイ・フォローアップ & スタディツアー報告

ムシキ-村婦人グループによる草木染め、手織りの布生産による自立計画とその支援

'86年にムシキ-村へ帰った農業研修生プリチャーさんは、学校での教師をし、授業を通じ生徒に農業を教え、また村の農業に携わる有志に日本での経験を伝え、村での農業生産を上げ、村の生活向上にコツコツと取り組んできました。ところがプリチャーさんの指導が実を結び村の中にある国の農業試験場からのやっかみがあつたり、彼がこの村の出身ではないための難しさなどから苦勞も多いようです。この姿勢を身近にみていた奥さんのチャンタナさんが、「ダンナだけでなく、女性にも何かできないだろうか」と考え、村のおばさんたちに相談をもちかけ、村に昔から伝わる草木染め、手織りを生かすことになりました。このアイデアに30人をこえる女性が集まりグループの代表にはタム-さんが選ばれました。'89年7月に始まったこの試みに対し、今回のツアーの中で話し合い、この布グループの活動を支援することになりました。タイの市場では草木染め、手織りの価値がいまのところ評価されず、国内では生産側



グループのリーダー、タム-おばさんの技術、作業に対する正当な評価として、この布を日本の人々に提供できればと考えます。今回ツアーに参加した者のうち、神戸の事務所に集まりやすい4人が中心となってこの計画の支援をするグループを作りました。注文、仕入れ、販売、PR、村への助言に加え、この布を加工した製品づくりなどをすすめていきます。すでに何人かの神戸の主婦の方が、見本製品の加工を始めています。村で聞いたこの計画の目的は次の通りです。

- ①仕事のない村の婦人たちの有効活用
- ②家族の収入を補助し、生活の改善をはかる
- ③布の品質向上の中で、創造的考えをもたす
- ④グループとしての活動を通じ、個々の責任と協同の意義を知る
- ⑤伝統の手織り・染めの技術を次代に引き継ぎ、服装の習慣、地域の文化を守る



織り上がった布の説明をするプリチャーさんが望む値では売れません。チェンマイに居られる浅井さん、大津さんに技術や販路に

状にしたもの、残り糸で作ったテーブルセンター状のものもあります。ここで色をお見せできないのが残念な、おだやかな、きれいな色です。お近くの方はサンプルをいくつか事務所に残っていますので見にお寄り下さい。ご遠方の方にはカラーカタログができるまでもう少しお待ち願います。販売法はそのカタログでご案内します。ご希望の方にはできあがりしだいお送りしますのでお申し出下さい。私たちが予想した以上に、好評で、今回もちかえったことが新聞にもとりあげられました。これからも農閑期



チェンマイで布グループの支援と助言をしておられる浅井さんを訪ねた

だけの生産なので、メンバーの増加があつても、限定販売的なものになると思います。布がとりもつムシキ-村と日本の草の根交流。次回入荷にあわせ、私たちが体制づくりをすすめています。布をお買いいただくことはもちろん、染め、織りに詳しい方、裁縫の好きな方、販路の開拓、その他私たちのグループに加わって下さる方も大歓迎よろしく願います。

カレンの布支援グループ「ソディー」代表 上原真理・藤岡佐知

カレン語で卵のことを「ソディー」といいます。ここからいろいろなものを産みだす願いをこ

# 第8期1班 研修生紹介

第7期生4名にかわり3~4月にかけて、新しい研修生がやってきます。当初4名を予定していましたが、送り出し側の都合でタイからの研修生が延期になり、まず3名が来日します。夏から秋にかけて2班として1~2名を予定。これから1年ご支援よろしくお祈りします。



Mr. Herupe Yowa  
ヘルベ・ヨワ  
男性 34才 農業指導員  
バプア・ニューギニア、  
フィンチャーヘン  
推薦団体：メラネシアキリス  
ト教協議会  
研修内容：稲作、野菜、  
養豚

ルター教会農業研修センターの指導員。農業専門学校を卒業し、76年~77年同センターのスタッフ。その後4年間村に入り実践的指導者として活躍。同センターの技術レベルアップを目的とします。可愛い1才の女の子を残して来日します。



Mr. NESTOR T. SERVANDO  
ネストール・セルバン  
男性 26才 農業  
フィリピン・ネグロス・オリ  
ンガオ村  
推薦団体：南ネグロス小  
農協協会  
研修内容：農業全般

父親は亡く母親と10人の姉弟の5番目。控え目な性格で村人との人間関係は良い。極貧の生活の中でそれに耐え将来村のホープとして期待されています。一足先に帰るドミーさんとの連携プレーに意欲を持っています。



Mr. Lelu Sapa  
レル・サパ  
男性 30才 農業  
バプア・ニューギニア、フ  
ィンチャーヘン  
推薦団体：メラネシアキリス  
ト教協議会  
研修内容：稲作、養鶏、  
養魚

ルター教会農村開発部付属の研修センターで有畜複合農業を学び、それを見事に自分の村で実践しています。7人兄弟の5番目誠実で優しい目が印象的です。

## 草の根の人々を訪ねて

— Report from Asia and South Pacific —

1989年の韓国比較研修の評価と、90年の研修の基礎的打ち合せの為、昨年のクリスマス直前に韓国を訪問してきました。

都市の産業労働者と農民の向上のために働く「韓国基督教産業開発院」、三つの韓国農村YMCAとそのフィールドが主な訪問先でした。この旅で感じたことを報告したいと思います。またこの報告は一昨年、一昨年来、タイ、フィリピンの草の根の人々やグループから教えられていることと、基本的なつながりがあるように思っています。

前述の二つの団体の主な働きは、団体それぞれ自身の中に自己目的的なグループを作ることではありません。貧困や不平等の構造の中でその構造を学習し、問題を認識し、そしてそれを地域の中で、地域の人々自ら解決するために方法論を学び、解決のための色々な技術(例えば農業全般、地域組織化、協同組合等)を修得する。そしてそれらを駆使して地域を変革する運動を起こしていく。これらはまことにラディカル(本源的、根源的)な運動ですが決してエキストリーム(過激)ではありません。

礼山農村開発協会、洪城週刊新聞、居昌、海南の農民会など、文字通り草の根に生まれた民衆組織がこの運動を地域ぐるみで展開しています。基督教産業開発院も、洪城、居昌、

海南の各YMCAもこれらの民衆グループを誕生させ、自立した動きに育て上げる重要な支援をしている団体です。それぞれこの動きの拡大や展開のために担当のスタッフを配し、これらが自立した時点でスタッフは、また別の地域に出向いていきます。

タイでもフィリピンでもこのような「グラスルーツピープルオーガニゼーション=草の根民衆組織」を生み出すNGO(非政府組織)がたくさん働いています。

一方日本や欧米から「モノ、ヒト、カネ」をたくさん引き出し、いつの間にかバンコクやマニラで北側の国の人々と同じような振舞や意識をもってしまふNGOもそれに倍してたくさんあります。

遅れて、貧しい、汚い、怠けものの農村や地方の人々に上から「モノ、カネ」を与えて援助してあげるといった姿勢が目立つ団体は、ほとんどの場合、受ける側の地域や人びとを援助依存症にさせてしまいます。

PHDはこの5年間相手の団体と交流し、またその紹介で山の奥や農村の人びとと出会ってきました。その中で実感していることは、それらの山や地方の人々の中に「草の根民衆組織」が生まれ育ってきているということでした。勿論逆方向のカウンターパートもありました。そのような交流を通じ、だんだん

交流先が選定されて少しずつ繋がってきています。

PHDが招いている研修生は、大体相手国の草の根民衆組織の中からの人々ですから、韓国の比較研修も年々技術的なものに加えて地域交流、グループ交流の可能性を含んでくるようになってきています。近い将来韓国のホストファミリーを引き受けてくれた人々と日本のファミリーが、一緒にタイやバプアニューギニアあるいはフィリピンを訪ねて下さることを望んでいます。

今年6月位にとりあえず2週間程韓国の有機農業を進める百姓を、日本のPHD研修の指導者である百姓のところへ引き交流を深めてもらうことを話し合ってきました。このような積み重ねが、必ず日韓の連帯を生み出し更に東南アジアに拡大していくことを信じます。PHDはいわばアジアの草の根民衆組織と日本のそれとをつなぐネットワークなのではないか、だからジャカルタ、ポートモレスビー、カトマンズ、バンコク、マニラ、ソウルなどの同じようなネットワークエージェンシーとつながる必要がある。そのためには日本の中に民衆グループが生れてこないとも交流も連帯も実現しない、そんな点を強く感じて暮の伊丹に帰国したのでした。

総主事/草地賢一

## PHD NEWS

### 会費・ご寄附寄託状況

1989年	11月	85件	2,310,235円
	12月	824件	9,753,239円
1990年	1月	286件	3,098,970円
計		1,195件	15,162,444円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴致しました。ご協力いただき深く感謝申し上げます。

### '90 PHDスタディツアー予定

ツアーレポートをご覧いただいてもおわかり

のように好評のPHDの旅。今年の子定は次の通りです。ご希望の方、お早めにお問合わせ!!

'90	8月下旬	インドネシア、西スマトラ	10名
	12月下旬	タイ(北部&東北部)	…15名
'91	1月上旬	ネパール	……数名



## 編/集/後/記

あの夏の夢のような日々が終わり、大阪空港についたその日から私はPHD熱が出ました。それ以降ずっとそれが続いて7ヶ月。8月のスタディツアーに加わって私の行った所はインドネシア。インドネシアは最高にHOTでしたよ。ご飯を手で食べたり、トイレに紙はないわ、でカルチャーショックという言葉以上のものを感じた私をやさしく包んでくれたのがインドネシ

アの人々の温かさでした。子供達はシャイで、始めはお母さんの影にかくれたりしたけれど、だんだん慣れて、一緒に歌ったり、最後はやかましいくらい叫んでくれたりと、心の楽園のようなものを感じました。それは今でも鮮明によみがえります。PHD事務所がちょうど学校とバス停の間にあるため、家まで帰る力がなかった時、暇な時と出入りが多く、自分のSecond Houseに使っています。(こんなこと書いたら、職員に来るなといわれそう~) 友達は沢山できるし、アジアをはじめとする第三世界のことに自分の知らなかったこと、テレビや新聞などで知識としては入っていても、研修生の口から聞いて本当だったんだと小さな感動をしたりと色々な事をPHDは学ばせてくれています。このままきつとりびりびりそう。この欄をお読みになり、もし会いたいと思う方がいらっしゃいましたら、きっと満月のように丸い顔の女の子が笑顔いっぱいでお迎えいたします。それが私です。(MIZUE)

レター編集メンバー  
 赤松恵美子 環 光子 伊藤洋子 得原輝美  
 川那辺裕子 柿原登志夫 団 圭子 中島千絵  
 中山 瑞恵 樋口千重子 遠見広心

# 新規会員・寄付者ご芳名は、個人情報保護のため掲載しておりません。

新規会員・寄付者ご芳名は、  
個人情報保護のため  
掲載しておりません。